**書道**

**書の文化**

書の文化は、3世紀以前に中国から日本に伝わったと考えられているが、少なくとも7世紀までは本格的な文書が作成されることはなかった。その当時、日本国内で読み書き能力は一般的に僧侶や貴族だけにしか備わっておらず、書は主に仏教の説話に限定されていた。その構成は古典中国語、またはそれに近いものであった。しかし、後の数世紀の間に、漢字が採用され、独自にアレンジされ、（その一部は）淘汰され、日本独自の書き言葉システムが出現した。書き言葉には、よく使用されていた単純化された続け書きの書体が元になって作られた2種類の一字一音のシステムの文字（ひらがなとカタカナ）が加えられた。明治時代（1868〜1912）の後半までには、日本のほぼ全人口に読み書き能力が備わり、話し言葉に似た書き言葉が見られるようになった。

何世紀も前から、筆で文字を書くことは中国では洗練され、賞美されてきた芸術であった。そして特筆すべき書道家たちは日本でもすぐに現れた。人の筆遣いの形と激しさは、それらの性質の微妙な面をも露わにすると言われ、能力の高い書道家たちはたった一文字でも素晴らしい美と表現の深さを描くことができる。この芸術は書道として知られるようになった。上品で賞賛されるほどの筆使いを持っていることは政治家や官僚にとって大事なことであった。美術的な評価に加えて、手紙、メモ、法令などにも一定の知識が必要であった。たとえば、多くの異なる挨拶文ではどの表現がその季節に適しているかも、大名は知っていなければならなかった。

**標準化**

江戸時代初期に貴族から一般階級に文字を書くということが広まるにつれて、書体はますます標準化していった。幕府が作成した公文書には、「御家流」と呼ばれる特定の書体が使用された。14世紀に尊円親王が書いた文書をモデルにしてこのスタイルは、すぐに下級武士の家族や一般の人々にまでもちいられた。当時、話された日本語は地域によって大きく異なっていたが、幕府が出した文書や発表は、単一の統一された基本的様式で書かれ、それが標準として理解されるようになった。

**将軍の書**

将軍によって書かれた書を与えられることは、大名一族にとって大きな名誉であった。井伊家では、将軍徳川家康が書き留めたメモでさえ保管され、一族の宝物として大切に扱われた。井伊家の書のコレクションには、徳川の第2代将軍と第3代将軍によって書かれた和歌と、徳川の第５代将軍によって書かれた手書きの儒教の解説書も含まれている。幕府内で強力な地位を占めていた井伊家にとって、このような代表的な書は、将軍との個人的なつながりを確認する方法でもあったようだ。